

第9期会長から

厳しさと温もり



羽島 良一*
Ryoichi HAJIMA*

第8期(2018~2019年度)に続き、第9期(2020~2021年度)の会長を務めることになりました。

この二年間、会誌記事のオープンアクセス化、webやtwitterによる情報発信の充実、外部団体への賞や助成金推薦の拡大など、会員の研究活動を支援し、社会における当学会の認知と信頼を高めることを目指した試みを重ねてまいりました。国内の多くの学協会が会員を減らしているなかで、当学会が会員を増やし、加速器科学、加速器技術の発展と、その社会貢献の拡大を力強く進めていることをうれしく思い、学会活動を支えていただいている皆様に感謝いたします。

さて、当学会の設立は、わが国の国立大学の法人化と同じ2004年です。法人化以降、国立大学の運営費交付金が毎年削減され、学問の多様性を担っていた基盤的経費が減らされる一方で、「選択と集中」の名のもとに特定分野に大型研究費が投入されてきました。このことの是非は、多くの識者が論じているところであり、ここでは繰り返しません。避けられない事実として、わが国の若年層人口が減少することに加えて、資本、労働力、情報が国境を越えて移動する時代に、わが国の経済的繁栄を維持するには、科学の分野においても国際的な競争、協調が欠かせないことを指摘したいと思います。

幸い、われわれ加速器分野の研究者は、これまで多くの国際プロジェクトを経験しております。国際的な舞台上、諸外国の研究者と肩を並べ、プロジェクトを先導するためには、それぞれの研究者が高い意識をもって日々の自己研鑽に励む必要があります。当学会においても、会員同士、時には厳しく批判しあうことが、研究者の成長と科学技術の健全な発展に欠かせません。そのために、年会および学会誌が質の高い科学的議論を繰り広げる場となることを目指します。

その一方、競争や評価にさらされる日々において、心の安らぎを得る場所としての学会の役割にも目を向けたいです。価値観や目標を共有するコミュニティとして、そこへ集う会員が、気分転換をしたり英気を取り戻せるように、学会を温もりのある場とすることも学会運営の大切な目標と考えます。加速器施設の建設と運転、開発し利用されてきた技術の裏側には、それぞれ、成功と失敗の経験談があります。こうした経験談を「物語」として会員が共有することは、コミュニティ(加速器、科学)に対する信念と絆を高め、学会を温もりある場として機能させることにつながると考えます。年会のプログラム編成、学会誌やオーラルヒストリの編纂では、こうした視点も取り入れます。

最後に、学会運営の実務上の課題についてです。昨年の総会で紹介しましたように、当学会の財政は楽観できない状況にあります。年会開催を含む学会運営の支出が増加傾向にある中、当学会は発足以来の年会費を堅持してきました。ボランティアで学会の運営に関与いただいている幹事や委員の負担を減らすには業務委託を増やしたいところですが、なかなか難しい状況です。これからの二年間に、会員の声に耳を傾けながら、財政基盤の強化に道筋をつけることにも努めたいと考えています。

* 量子科学技術研究開発機構